

レオナルド・ダ・ビンチ の「最後の晩餐」

2019年 5月 25日

大和田 哲郎

1.中世、ルネッサンスの頃の絵画

当時の絵画は主に二つの方法で描かれていた。

一つは「テンペラ画」、もう一つは「フレスコ画」である。

2.テンペラ画

現代の油彩画は、顔料と接着剤（乾性油等）を混ぜた絵具で板や布のキャンバス地等に絵を画く。

画かれた絵具は接着剤（乾性油）の酸化重合により顔料をキャンバス、又は板の上に定着させ絵画が出来る。

当時のテンペラ画の絵具は顔料と卵の黄みから出来ていた。卵の黄みが接着剤の役目をし、基剤に顔料を定着させるので、卵テンペラとも云われている。

3.フレスコ画

主として、壁画に用いられる技法である。

壁面に絵を描く事はかなり以前から行われていた。その当時は壁面に顔料を接着剤で固定化する方法で行われており、厳しい環境下に置かれれば、多かれ少なかれ長い年月の間に描画層（絵具）が剥落してしまう運命にあった。

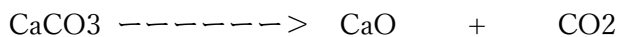
所が、13世紀の中頃、耐久力に弱点があった壁画技法に革命が起こり、主としてイタリア半島で一気に普及した。

この技法はジョットが考え出した技法で Buon Fresco と呼ばれている。

Buon Fresco の技法

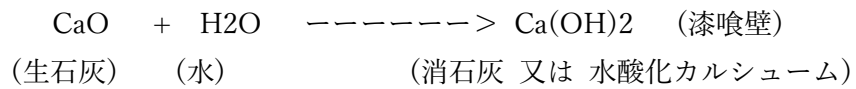
まず、漆喰壁はどのようにして作るか から説明します。

1) 石灰岩 (CaCO<sub>3</sub>) を焼いて生石灰 (CaO) を作る



90度以上

2) 生石灰 (CaO) を水でこね、壁の下地の上に塗ると 7~8 時間後に生石灰 (CaO) が消石灰「Ca(OH)2」に化学変化し、強固な壁が出来る。



上記(2)の行程で、水でこねた生石灰を壁に塗り、その生石灰がナマ乾き fresco (英語の fresh)の状態の時に、水だけで溶いた顔料で絵を画く。

そして 7~8 時間後には消石灰に化学変化をして、フレスコ画が完成する。

実際には、この壁は空気中の炭酸ガスと反応し、炭酸カルシウム (石灰石、大理石) に変化し更に頑強な壁に徐々になる。

フレスコ画法のメリット、デメリット

1.漆喰が生乾きの時間は 6~7 時間、この間に全ての絵を描き終えなければならない。

それは不可能に近い。

それで考え出されたのがジオルナータ法。

これは、まず、絵を画く壁面に、これから画く絵の下絵きを画く。

そして今日一日 (約 6 時間位) で画く部分にのみ、こねた生石灰を塗り、この生乾きの生石灰面に絵を描く。

次の日、その次の日とこの作業を続けて絵を完成させる。

この一日・一日・一日・・・・・・で仕上げる方法を "ジオルナータ" と云い、面倒でもこの方法で行っていた。(giorno >>>> giornata)

2.フレスコ画法の絵具は水溶性の顔料を用いる。石灰系の物質はアルカリ性であり、アルカリ性で変色しない顔料を求めなければならない。

等

レオナルド・ダ・ビンチは壁画「最後の晚餐」を壁画の常識を破りテンペラ画法で書き上げた。

彼は絵を仕上げた時点で絵具の退色が気がかりであったのであろう。

彼はミラノからフィレンツェに戻り、パラッツォ・ベッキオの壁画を依頼されたが途中でギブアップしたと云われているが・・・・

以上